

チャップリンの職業観

飯野友紀（経済学部3年）

指導教員：山本武男

本論文では、チャールズ・チャップリンの職業観について検証した。チャップリンの代表作である『モダン・タイムス』では、過酷な労働や人間が機械に使われる姿が面白おかしく描写されている。一方、作品中には主人公が失業していても幸せそうに暮らしている場面がある。この作品の中で、何故職があるときよりも失業しているときの方が幸せそうに表現されているのかという疑問を持った。そこで、今回は、チャップリンにとって労働・仕事とはどのような意味を持っていたのかという問題を検証する。更に、チャップリンの作品中に労働と幸福が結びついている職業はあるのかについても調べる。

労働問題が深刻化する今日の私たちの環境は、『モダン・タイムス』の作品中で出てくる工場の労働環境と共通する部分があるかもしれない。チャップリンの作品から今日の労働問題解決への糸口を見出すのが本論文の意義である。

研究方法は、チャップリンの全82作品中、現存する81作品のストーリーや特徴、また職業やその描かれ方を検証するというものである。全作品の職業を書き出した後は、職種ごとに分類して比較し、どの職業がより幸せそうに描かれているのかを調べる。

検証の結果、農村での生活・自営農が最も幸せそうに描かれていた。例えば、『犬の生活』という作品は、都会で職に就けずに困っていた失業者である主人公が、飼い犬と歌手の女性と一緒に農村へ行き幸せに暮らすというストーリーである。都会の生活と農村での生活が対比されており、農村での生活がいかに幸せであるかということが伝わってくる。また、反対に『給料日』という作品では、建設現場で働く主人公が、酒を飲んで歌えば苦情が来たり、満員電車に何度も試みても乗ることが出来なかつたりという都会の生き辛さが表現されている。

何故、農村の方が幸せに描写されているのかという理由は、チャップリンの作品全体から読み取れる。前述のように、都会の生き辛さなどを表現した作品があるのに加えて、多くの作品の中でモノの不便さを描写しているシーンが見られる。人間が作り出した様々な道具やルールは、一見便利なものに見える

が、同時に不便な面もあるということを表している。更に、機械化が進む中では、機械に呑み込まれたり、精神を病んだりするなど、人間性が阻害される。このような道具や機械が溢れた都会での生活と比較して、愛するパートナーと共に、農村で生活することの幸福が描かれていたと考える。

このようにチャップリンの作品からは、都会よりも農村での暮らしの方が理想的であるという考えが読み取れた。